

文学表現による過去の積雪量の推定に関する一考察 ～その1 雪のイメージに関するアンケート調査～

A study on the Estimation of the Past Snow Depth for the Literary Expression. ～Part 1 Questionnaire Investigation on the Image of the Snow～

松村光太郎, 上村靖司*, 柴田美由紀, 千葉幸一郎**

Kotaro Matsumura, Seiji Kamimura, Miyuki Shibata, Koichiro Chiba

1. はじめに

近年, 分野を跨いだ横断的な研究が, 社会的な有効利用方法として着目されている。その手法の1つとして, 人文学と自然科学との横断が考えられる。特に, 人文学には, 各々の時代に, 歴史書, 物語, 戯曲, 詩, 短歌, 俳句, 日記など, 「言葉」を使った様々な種類の膨大な資料が存在する。これらの「言葉」には十分な資料的価値があり, 自然科学に活用していくことは, 過去の自然環境を知る上でも有効だと考えられる。

そこで, 本研究では, 「言葉」を利用している膨大な人文学の資料における雪に関する表現から, 過去の積雪量を推定することを最終的な目標としている。

本報告(その1)では, 第一段階として, まず, アンケート調査により, 雪に関する「言葉」から, 人間が想像する「雪のイメージ」を明らかにすることを目的とした。

2. アンケート調査

2.1 調査方法

アンケートは, 雪に関する「言葉」と人間が意識する積雪量のイメージとの関係を明らかにすることを目的として, 雪に対する感情, 雪のイメージ, 雪に関する言葉の意識について調査を行った。

アンケート調査は, 無記名で, 選択式, 記述式の両者を混ぜた質問で行った。

アンケートの調査対象は, 雪が降る地域と雪が降らない地域とで「雪」に対する印象が異なると考えられるため, 雪が降る, あるいは降らないという地域性を考慮して, 次の地域を対象とした。

まず, 雪が降る地域から, 豪雪法で豪雪地帯と特別豪雪地帯の両者が混在する地域(以下, 積雪地帯と呼ぶ。)と考えられる新潟県三条市近傍の

住民を対象とした。そして, 積雪地帯と非積雪地帯との両者が混在すると考えられる栃木県小山高専の学生および小山市近傍の住民を対象とした。また, 雪が降らない地域からは, 非積雪地帯が多いと考えられる兵庫県明石高専の学生を対象とした。併せて, 雪に興味があると考えられる雪形ミニシンポジウムの参加者を対象とした。

2.2 調査内容

アンケートは, 以下の内容とした。

- 問1. 年齢(選択式)
- 問2. 性別(選択式)
- 問3. 現住所(記述式)
- 問4. 積雪地での生活経験の有無(選択記述式)
- 問5. 雪の好き嫌い(選択式)
- 問6. 遊雪経験の有無(選択式)
- 問7. 遊雪希望の有無(選択記述式)
- 問8. 雪の邪魔度意識(選択式)
- 問9. 雪の便利度意識(選択式)
- 問10. 雪での怪我の有無(選択式)
- 問11. 名詞の雪言葉の認知度(記述式)
- 問12. 形容詞の雪言葉の認知度(記述式)
- 問13. 動詞の雪言葉の認知度(記述式)
- 問14. 雪言葉による積雪度意識(選択式)
- 問15. 近景の雪言葉による積雪度数値認識(選択記述式)
- 問16. 遠景の雪言葉による積雪度数値認識(選択記述式)

2.3 アンケート調査結果の概要

アンケートの調査は, 2003年9月1日現在で合計145名の回答を得ている。アンケート調査は, 今後の研究継続のため, および結果の信憑性を高めるために, 現在も継続している。

以下に示す本報告の調査結果は, 145名の回答から導いた結果とした。

アンケートに回答した年齢層と男女比とを図一1に示す。

年齢層は、工業系の学生を中心として調査を行ったため10歳代の男性が最も多かった。

積雪地域における生活経験の有無を図一2に示す。

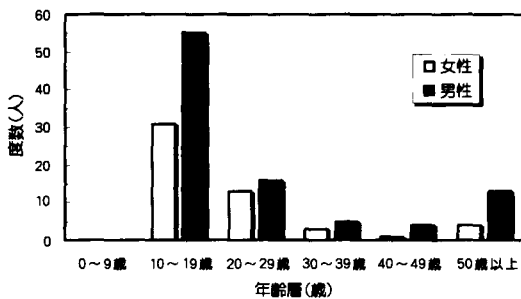
積雪地域での生活経験が有る者の割合は、現在生活中と回答した人数と、過去に1年以上の生活経験が有ると回答した人数とを併せると約半数であった。

3. 結果と考察

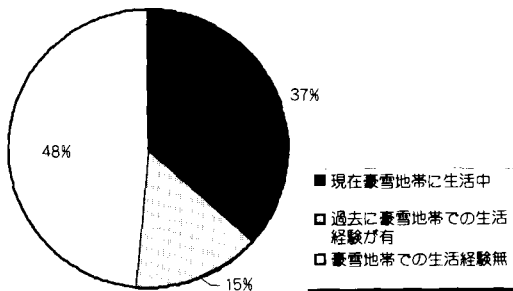
3.1 雪の好き嫌い

雪の好き嫌い、遊雪希望との関係を図一3に、怪我の有無との関係を図一4に示す。

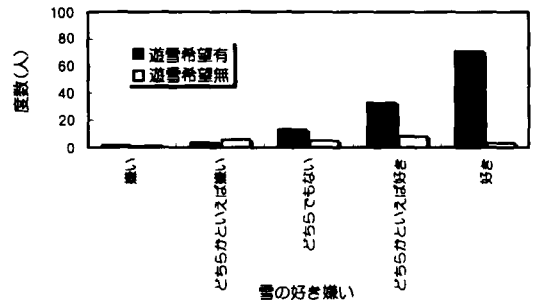
雪の好き嫌いは、怪我の有無とは関係なく、「好き」あるいは「どちらかといえば好き」という回答が多い結果となった。また、雪の好き嫌いとは関係なく、遊雪希望の回答が多くなった。このことから、積雪地域での生活経験に関係なく、雪に対して好印象があると考えられ、今後の利雪、親雪関連の有効性が伺える結果となった。



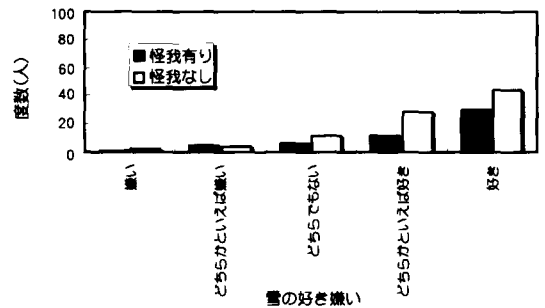
図一1 年齢および男女比



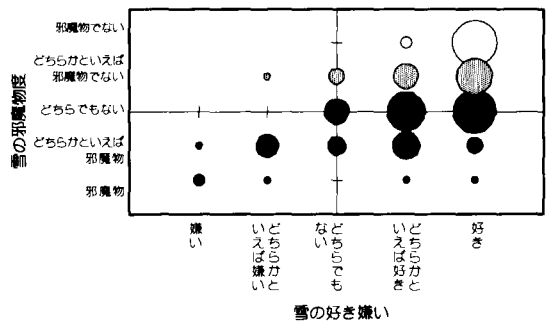
図一2 積雪地域での生活経験の有無



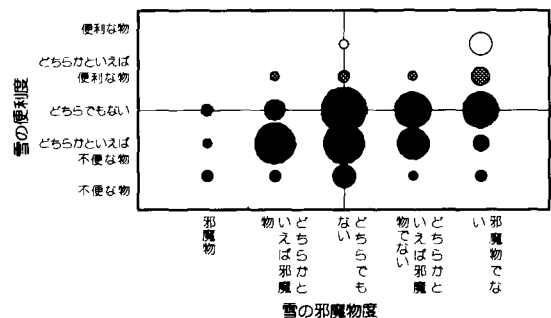
図一3 雪の好き嫌いと遊雪希望との関係



図一4 雪の好き嫌いと怪我経験との関係



図一5 雪の好き嫌いと邪魔物度との関係



図一6 雪の邪魔物度と便利度との関係

文学表現による過去の積雪量の推定に関する一考察 ～その1 雪のイメージに関するアンケート調査～

雪の好き嫌いとは邪魔物度との関係と図-5に、雪の邪魔物度と便利度との関係を図-6に示す。

雪の好き嫌いとは邪魔物度との関係は、「雪が好き」なのに対して、「雪は邪魔物ではない」という関係として、ほぼ一義的であると思われる。なお、総合的には「邪魔物でない」あるいは「どちらかといえば邪魔物でない」の回答が多かった。

雪の邪魔物度と便利度との関係は、邪魔物度の認識とは関係なく、雪が便利さに欠けると認識されていた。これは、利雪、親雪などの雪の有効利用に関する情報が不足しているか、あるいは利雪、親雪などの現実が遅れていると考えられる。

以上の結果から、雪に対しては好印象があるのにもかかわらず、雪が不便な物と認識されており、利雪、親雪などの雪の有効利用に対する宣伝効果の利用を早急に行い、また、現実することが望まれる。

3.2 遊雪経験および遊雪希望

過去の遊雪経験の種類と件数とを図-7に、今後の遊雪希望の種類と件数とを図-8に示す。

過去の遊雪経験は、29種類の回答があった。その中でも、「雪合戦」は回答者の81.4%に経験があり、最もポピュラーな遊びと考えることができる。続いて、「スキー」が65.5%、「雪だるまつくり」が64.8%の経験があった。

今後の遊雪希望は、28種類の回答があった。その中で、「スキー」と「スノーボード」の希望が多かった。これは、10歳代のアンケート回答者が多かったことが起因していると考えられる。また、遊雪希望の種類数が遊雪経験の種類数よりも少なかったことは、遊雪の情報が不足しているか、あるいは現代人が、遊びに対する想像力が欠如しているからだと思われる。

3.3 雪の言葉に対する意識

雪から想像できる語彙(以下、「雪言葉」と呼ぶ。)として、名詞、形容詞、動詞をそれぞれ、アンケート回答者が思い浮かべられるだけ列挙する方式で回答を得た。その結果、名詞が169種類(659件)、形容詞が59種類(410件)および動詞が78種類(402件)の回答があった。

(a) 名詞

雪から想像できる名詞として、5名以上が列挙した31種類について、KJ法¹⁾でまとめた雪にまつわる言葉群としての雪言葉を図-9に示す。

回答のほとんどが、「雪合戦(36件)」「スキー(35件)」「雪だるま(34件)」あるいは「かまくら(28件)」といった遊雪に関する雪言葉であり、雪が遊びと直結していることが伺える。また、雪国の日課と考えられる「雪下ろし(5件)」や「雪かき(9件)」などは、ごく少数であった。これは、人間が何かをイメージする際に、より良いイメージを先行させる心理作用が働いたと考えられる。

また、列挙する際に、「お正月」から「こたつ」そして「雪うさぎ」といった、連想的な雪言葉を連続的に列挙する傾向も目立った。

なお、列挙された雪言葉のほとんどが道具類、行事類であり、風景や動物は少数であった。

(b) 形容詞

雪から想像できる形容詞として、2名以上が列挙した29種類について、KJ法¹⁾でまとめた雪にまつわる言葉群としての雪言葉を図-10に示す。

回答のほとんどが「冷たい(104件)」であり、雪は冷たい物という意識が強いことがわかった。続いて「寒い(46件)」「白い(44件)」「きれい(37件)」など、気象的な要素を含んだ語彙と、雪のイメージから想像された語彙とが列挙された。

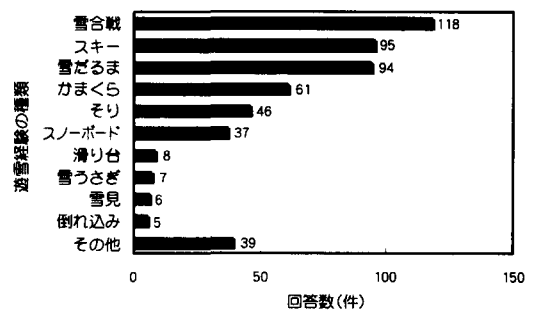


図-7 遊雪経験の種類と件数

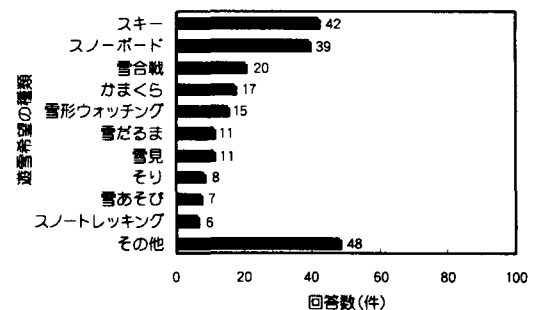


図-8 遊雪希望の種類と件数

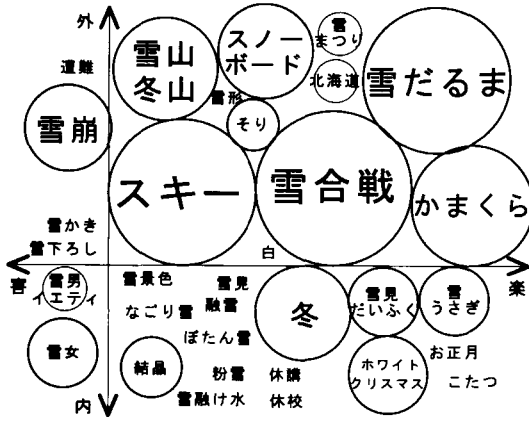


図-9 想像された雪言葉(名詞)

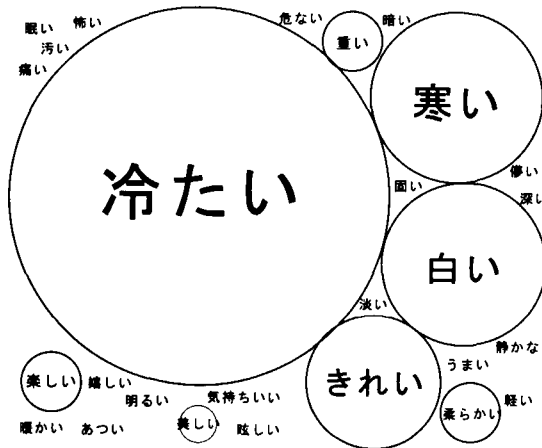


図-10 想像された雪言葉(形容詞)

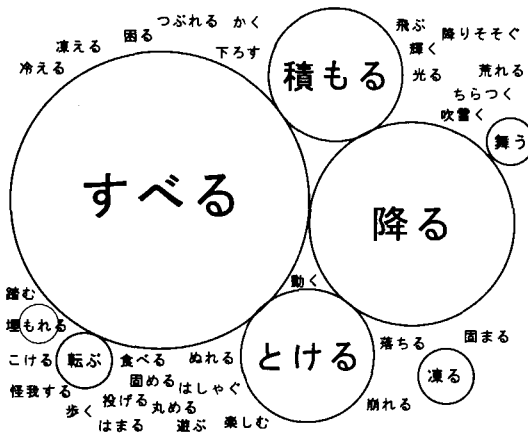


図-11 想像された雪言葉(動詞)

イメージから想像された語彙としては、「美しい」「嬉しい」などの雪に対する良好なイメージの雪言葉の件数が多く、「怖い」「汚い」などの不のイメージは少数であったが、語彙数は、良好なイメージと不のイメージとでほぼ同数であった。しかしながら、「冷たい」と「暖かい」あるいは「重い」と「軽い」、「暗い」と「明るい」など、正反対のイメージが同居する結果となった。これは「雪」に多様性があるからだと考えられる。さらに、少数ではあるものの、「暖かい」「美しい」「うまい」などの言葉もあり、利雪、親雪などの有効利用に繋がる可能性も見られた。

(c) 動詞

雪から想像できる動詞として、2名以上が列挙した38種類について、KJ法¹⁾でまとめた雪にまつわる言葉群としての雪言葉を図-11に示す。

「すべる(77件)」が最も多く、続いて「降る(53件)」「とける(35件)」の順となった。列挙された語彙数および件数ともに、雪が主語となる動詞と、人間が主語となる動詞との割合が約半々となった。しかしながら、雪を不のイメージとして捉えている動詞が多く、積雪地域での生活経験に関係なく、積雪状態での行動に関しては、良好なイメージがないと思われる。

4. まとめ

本研究では、想像できる「雪のイメージ」を明らかにした。その結果、「雪」は、好まれる傾向が強いが不便だと思われる。また、「雪」には多様性があり、不便ではあるが、利雪、親雪などの有効利用に繋がるイメージも見られた。

5. 本研究の今後の展開

今後、過去の積雪量を推定するために、想像できる積雪量と言葉との関係を明らかにし、(1)式を展開していく予定である。

$$(積雪量) = (雪の表現) \times (作家係数) \times (作品係数) \times (時期係数) \dots (1)$$

参考文献

1) 川喜田二郎：発想法，中央公論新社，1966

* 長岡技術科学大学 講師 kami@mech.nagaokaut.ac.jp
 ** 宮城工業高等専門学校 助手 chibako@miyagi-ct.ac.jp